

若年者の都市内空間選好に関する一考察

林 達朗¹・孔 相権²・山田 圭二郎³

¹非会員 京都市産業観光局産業政策課（〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地,
E-mail:habba684@city.kyoto.jp）

²非会員 博士（工学） 山口大学工学部感性デザイン工学科（〒755-8611 山口県宇部市常盤台2丁目16-1,
E-mail:koh@yamaguchi-u.ac.jp）

³正会員 博士（工学） 京都大学大学院工学研究科（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1,
E-mail:kejirou.yamada.6w@kyoto-u.ac.jp）

若年者、とりわけ社会人になる一步手前の多感な時期にあり、行動力、経済力を持ち始めた大学生が、自分の生活環境をどう捉え、どのような期待を抱いているかを明らかにすることは、多世代が過ごしやすい都市空間を形成する上で大変重要である。このような問題意識のもと、本稿では、大学生への行動調査に基づき、大学生が選好する都市内空間の抽出を試みた。その結果、若年者は、都市の中に、ある程度他人との関係を持ちながら、一人になり自分の好きなことを楽しめるゆとりある空間を求めていることを明らかにした。さらに、そのような空間が構築される条件として、他人から過度に干渉されず互いに行動を認め合える、秩序が保たれた状態が実現される必要性を指摘した。

キーワード: 若年者, 空間選好, 社会的空間, 多用途な空間, 空間的連続性

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

我が国は、経済成長のスピードが鈍化し、人々が競争し富を獲得しあう社会から、限られたリソースをどの世代に振り向け、足りない分を互いに助け合うことにより補完しながら、社会全体で心安らかな生活をおくるすべを見つけなければならない社会に移ってきている。

このパラダイムシフトの中で、多世代が同一の都市空間の中で互いに支えあうことで都市の諸問題を解決し、心豊かで心安らかな暮らしをつくりあげていくためには、各世代が互いの価値観を受容し、共存を図っていくことが必要である。そのためには、特定の世代に傾注せず、多世代が過ごしやすい都市空間の形成が不可欠である。

都市における活動主体は、居住者、来街者、さらに居住者の中でも高齢者、中高年者、青年、子どもと多岐にわたる。しかし、都市空間づくりを考えると、弱者としての高齢者及び子どもを主たる主体と捉えた研究は多いが、若年者の選好性について、行動調査を踏まえて研究された事例はあまりみられない。

このような問題意識から、本研究では、若年者、その中でも大学生の視点からの都市空間づくりに焦点を当てる。次代の担い手である若年者は、これまでの大量消費、経済成長重視とは異なる価値観を持ってきていることが、

近年の社会学、心理学等の知見から明らかになっている。そこで本稿では、若年者の都市内空間の選好を明らかにするとともに、その結果の考察を行うことで、若年者が選好する都市を実現するための方策を研究する。

(2) 既往研究から得られる知見と本研究の位置づけ

ここでは、本研究の主要な構成要素である都市空間と若者の心理についての既往研究から、研究の背景となる知見をまとめ、本研究の位置づけを示す。

a) 魅力的な都市空間

魅力的な都市空間についての研究は、ケヴィン・リンチ¹⁾やジェイン・ジェイコブズ²⁾にみられる。

ケヴィン・リンチ¹⁾は、都市を享樂し、利用するためには、イメージの鮮明さと一貫性が決定的な条件であると主張した。都市のイメージを決定する成分をアイデンティティ（他と区別された特徴）、ストラクチャー（構造、空間的パターン）、ミーニング（空間が持つ意味）とし、そのうちミーニングについては個人的に幅を持つものとして切り離し、計画者が物理的に操作することが容易である都市の形態（アイデンティティとストラクチャー）に焦点を当てて、都市の見方を論じた。個々の空間の存在や意味よりも、都市全体のイメージの分かり易さが最も重要であると主張している。

一方、ジェイン・ジェイコブズ²⁾は、大都市における

人々の社会的な行為や経済活動を詳細に観察し、都市が安全で暮らしやすく、かつ経済的な活力を生じるためには、複雑に入り組んだきめ細かな多様性が必要であると主張している。最も重要な要素である多様性が生まれる条件として、「街路の幅が狭く、曲がっていて、一つ一つのブロックの長さが短いこと」、「古い建物と新しい建物が混在すること」、「各区域は、二つ以上の機能を果たすこと」、「人工密度ができるだけ高いこと」をあげ、これら4条件をすべて満たす都市こそが魅力的な都市であり続けているとしている。

リンチが、都市の表面的な形態を重視しているのに対して、ジェイコブズは活動する人々にとっての空間の持つ機能の多様性の重要性を主張している点で、両者には違いがみられる。本研究では、リンチとジェイコブズの中間的な視点で議論を進めてみたい。とりわけ、都市空間を活動の場とする若年者にとっての空間の意味を深耕することが、本研究の主眼である。

b) 若者の心理

この30年で、若者の社会及び他人とのコミュニケーションに対する意識は大きく変化している。

社会心理学の知見をまとめた岡田³⁾は、若年者は、自己の行動が他人に及ぼす影響を負担に感じ、他人に対して無関心になっていると論じている。

若者がこのような内向的心理に向かっている一方で、高度情報化に伴いコミュニケーション手段の多様化とコミュニケーションの強制が進んでおり、自己の意思とは関係なく常に誰かとつながり続けていなければならない状況が生じている。このことは、若者の孤独化を防ぎ、社会性の向上にプラスに作用している面もある。しかし一方で、常に他人とのコミュニケーションを強制されることで、自己を形成するための余裕を持たず、それが心理的な負担となっているのではないかと考えられる。

このような状況下で、若者はいつどのような場所で、心の安らぎを感じるのでしょうか。おそらく、強制的につながり続ける状況から一歩身を引き、自己を見つめ直す時間の貴重さを重視しているのではないだろうか。ただし、その場合においても、自分の部屋で孤独に何かを行うのではなく、他人との関係性のある程度意識しながら、自分の好きなことをできる環境を望んでいるのではないだろうか。

(3) 研究の方法

本研究では、若年者が都市に求めることとその背景にある価値観を同時に把握するために、まず、大学生への行動調査（アンケート）を行う。次に、そこから得られた知見を基に、若年者が選好する都市内空間について考察する。

なお、本研究で対象とする若年者は、自分の行動につ

いて意思決定ができ、時間的、経済的にある程度余裕があると思われる大学生（大学院生、短大生を含む）とする。

2. 若年者のお気に入りの場所・行動

ここでは、大学生の都市における日常的な行動を明らかにするために、大学生（大学院生、短大生を含む）を対象に行った調査の結果をまとめる。

なお、アンケートは、回答を容易にする観点から、街中の最もお気に入りの場所に着眼して構成しているが、お気に入りの場所と一緒に訪れる人、その場所であることを同時に聞くことによって、その場所を訪れる理由を心理的な側面から分析することを目的としている。

(1) 調査概要

大学生に対して、平成25年8月から11月の期間に、調査票を用いたアンケート調査を行った。

調査は、主として京都市内の大学・短期大学及び大学院で行い、これらの学生を対象とした。なお、回答は、特定の授業に集まった学生のうち協力を承諾した学生から得たため、学部により偏りがあるとともに無作為抽出とはなっていない。

アンケートの内容は、主に以下の項目とした。①個人属性、②最もお気に入りの場所、③最もお気に入りの場所と一緒に訪れる人、④最もお気に入りの場所であること、⑤最もお気に入りの場所と合わせて訪れる場所とした。また、人との出会いのきっかけを把握するために、⑥最近新しく人と知り合った場所とそのシチュエーションについても聞いた。

(2) 調査結果

以下に、アンケートの主な結果を示す。

a) 回答者属性

回答は、下表に示す大学、大学院生114サンプルで、男性69サンプル、女性45サンプルである（表-1）。

表-1 回答者属性

	学 年						
	計	1年	2年	3年	4年	修士	博士
京都大学院	11					9	2
立命館大学	85		22	41	12		10
大阪大学	5	2	3				
華頂短期大学	1		1				
京都建築大学校	12			7	3		2
合 計	114	2	26	48	15	9	14

注) 大阪大学は、全員が豊中キャンパスへの通学者

京都建築大学校は、南丹市園部にキャンパスがある

回答者の居住地構成は、京都市内71サンプル、京都市以外の京都府内16サンプル、大阪府内18サンプル、滋賀県内3、兵庫県、奈良県などその他地域6サンプルである。ほとんどが通学時間が1.5時間以内であり、日常的に余暇行動を行える環境にある。

b) お気に入りの場所

「最もお気に入りの場所」を自由記入方式で具体的に聞いた。記入された場所を、店・施設、まち、自然、その他の4つのカテゴリに分類すると、「店・施設」が最も多く49サンプルで、次いで「まち」が29サンプル、「自然」が23サンプル、「その他」が11サンプルの順に多い(図-1)。

「店・施設」では、カフェが圧倒的に多く、次いでその他の飲食店(ラーメン屋など)、書店・図書館、スーパー・コンビニ、娯楽施設が多い。

「まち」では、四条河原町界限、三条通界限、上七軒/町家、京都駅周辺、梅田周辺、二条城などが多い。上七軒/町家が多いのは、サンプルの多くを立命館大学の学生が占めているため、通学途中に立ち寄る行動が多かったことも一因である。

「自然」では、鴨川が圧倒的に多く、嵐山/渡月橋、琵琶湖、南禅寺・青蓮院・琵琶湖疎水などの史跡、景勝地が挙げられた。なお、自然のカテゴリには、その場所を訪れる目的が、風景鑑賞といった自然を愛でる行動であるものを含めた。

「その他」では、自宅(自分の部屋)、実家、車(自家用車)の中といった内向き志向の回答に加え、電車の中という回答も挙げられた。

通っている大学、学年や性別によって回答傾向に大きな差異は見られないが、カフェは比較的女性に多く、ラーメンなどその他の飲食店は比較的男性に多い。

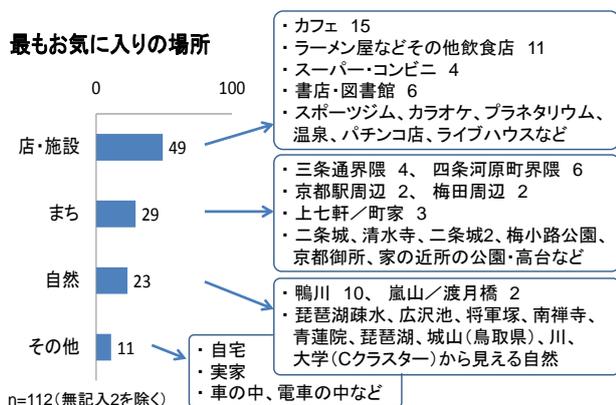
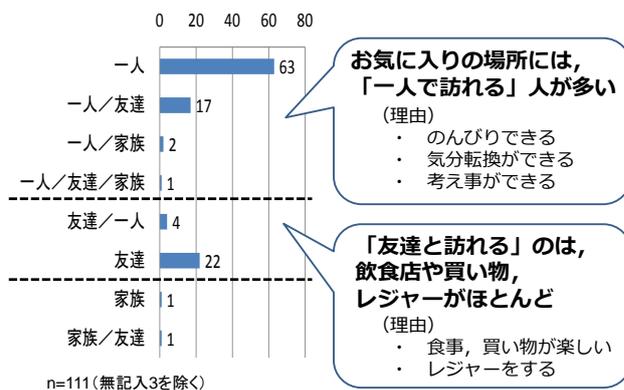


図-1 最もお気に入りの場所

c) 最もお気に入りの場所を一緒に訪れる人

最もお気に入りの場所を一緒に訪れる人について、一人、友達、家族などの例示をして、自由記入形式で聞いた。



「一人」で訪れるには、
「一人で訪れる」人が多い
(理由)
・ のんびりできる
・ 気分転換ができる
・ 考え事ができる

「友達」で訪れるのは、
飲食店や買い物、
レジャーがほとんど
(理由)
・ 食事、買い物を楽しむ
・ レジャーをする

図-2 最もお気に入りの場所を一緒に訪れる人

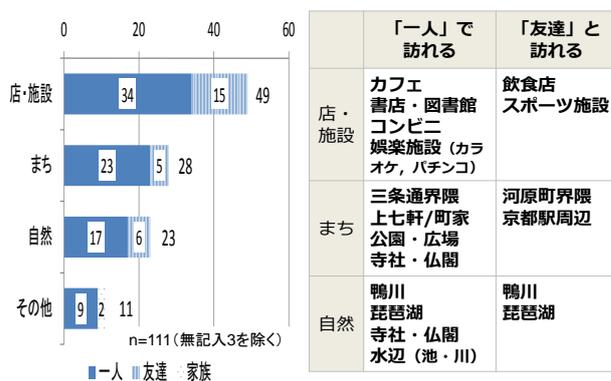


図-3 最もお気に入りの場所を一緒に訪れる人(場所別)

た。なお、回答結果を厳密に反映するため、「一人又は友達」と「友達又は一人」を区別して集計した。これは、当該設問が複数回答を許しているため、初めに記入した回答の行動頻度が高いと考え、その点を評価することを目的としている。

まず、場所の属性を考慮せず集計すると、「一人」が圧倒的に多く、次いで「友達」、「一人又は友達」の順に多い。「一人」を第一位項目とした回答が83サンプルで回答全体の74.1%にもものぼり、お気に入りの場所は一人で訪れるという傾向が顕著である(図-2)。

次に、一緒に訪れる人の第一位項目の回答を「一人」「友達」「家族」に集約して、お気に入りの場所との関係を考慮して集計すると、「店・施設」では約3割と「友達」が比較的多いが、「まち」「自然」では「一人」が大部分を占める(図-3)。

場所別にみると、「店・施設」の中では、カフェ、書店・図書館、スーパー・コンビニ、ショッピング、娯楽施設が「一人」が多い。娯楽施設のうち一般的には友達と訪れると思われるカラオケでも、「一人」との回答を得た。その他の飲食店の大部分とスポーツ施設で「友達」との回答を得た。スポーツ施設はサークル活動での来訪で、その他の料理店は学校帰りの食事といった回答が多い。

「まち」の中では、河原町界限及び京都駅周辺は、「一人」と「友達」が同程度である。一方、三条通界限、上七軒／町家、公園・広場、寺社・仏閣は、ほとんどが「一人」である。まちのカラーによって、「一人」での行動が好まれるまちと「友達」との行動が好まれるまちに区別されていることが示唆された。

「自然」の中では、鴨川と琵琶湖で「一人」と「友達」の両方の回答がみられる。これらは、サークル仲間とバーベキューなどのレジャーのために訪れる行動である。これらのレジャー行動以外はすべて、「一人」で自然・景観を眺めるといった行動である。

d) 最もお気に入りの場所を訪れる理由

最もお気に入りの場所を訪れる理由を、自由記入形式で聞いた。

「店・施設」の中では、最も回答が多かったカフェが、「落ち着いて一人の時間を過ごせる、ゆっくりと考え事ができる、何もしなくてよい、一人でコーヒーを飲みたい人が集まっている」といった回答が大半で、一人でゆっくり物事を考えることができる空間、また、同じ考え方を持っている人が集まっている空間をお気に入りの場所と捉える傾向が顕著である。また、レストランなどのその他の飲食店では、「友達と楽しく食事や会話ができる」が回答の大半を占め、気心の知れた仲間と楽しい時間を過ごしたいという行動も見られる。

「まち」の中では、三条通界限は、「街並みを見るのが楽しい、通りの雰囲気が良い、好きな店が多い」といった回答が多く、休日や時間に余裕がある時に、一人で好きなまちを見てゆっくりできる環境を求めて訪れていた

傾向が顕著である。一方、河原町界限は、「アクセスがしやすい、いろいろな店が集まっていて買い物がしやすい、楽しい」といった回答が多く、平日の学校帰りに、交通の利便性が良い場所で、買い物や友達と会話して楽しめる環境を求めている傾向が表れている。また、上七軒／町家は、通学途中にきれいな景色を見ながらほっとできる環境として、清水寺などの寺社仏閣や梅小路公園は、美しい景色やオープン空間の中で散歩を楽しむ環境として捉えられている。近所の公園は、「人が来なくて自分だけの空間と感じられる、景色を見ながら気持ちの切り替えができる、考え事ができる」という回答で、自宅の外で一人になり、気持ちを落ち着けるための場所を求めているという特徴的な結果も得られた。

「自然」の中では、鴨川は、「自然が感じられ適度に人がいて落ち着く、考え事ができる、ゆっくりできる、静かだから、お金がかからない」といった回答が多く、街中と少し異なり、自然の中でありながらある程度人がいる空間で、ゆっくりと考え事ができる環境を求めているという傾向が見られた。また、そのような環境をお金をかけずに手に入れたという、大学生ならではの感覚も特徴的である。その他の川などの水辺空間や寺社仏閣でも、「きれいな景色を見ながら一息つける、私的な空間が作れる、ジョギングをしながら自然を感じることができる」など、自然の中で好きなことをしながらゆとりを感じることができる環境を求めているという点で、他の場所と同様の結果が得られた。

e) 最もお気に入りの場所ですること

お気に入りの場所ですることを、自由記入形式で聞いた(表-2)。

表-2 最もお気に入りの場所ですること

		お気に入りの場所ですること												
		ぼうつとする/考え事	読書、音楽鑑賞	勉強	食事	会話	待ち合わせ	買い物	趣味/娯楽	スポーツ/レジャー	散歩	景色を眺める	心を清める	
店・施設		6	9	6	14	7	1	8	6	2	1	0	0	
カフェ		4	6	4	3	4	1							
飲食店	お好み焼き屋、ラーメン屋など			1	10	2	1							
書店・図書館			3	1				2						
スーパー・コンビニ		1						3	1		1			
ショッピングセンター	百貨店、古着屋							2						
スポーツ施設									2					
娯楽施設	カラオケ、パチンコなど							1	5					
温泉		1												
大学内					1	1								
まち		2	0	0	4	0	0	12	0	2	10	2	1	
河原町界限					2			5			1			
三条通界限					2			3						
京都駅周辺								1			1			
梅田界限								2						
桂川街道								1						
公園・広場	梅小路公園、京都御所など										2			
	近所の公園	2									1	1		
上七軒/町家											2	1		
寺社仏閣	平野神社、龍安寺、京都御所など										3		1	
	二条城								2					
自然		6	0	0	0	3	0	0	2	4	1	7	0	
鴨川		4				3			2	2				
嵐山・渡月橋		1										1		
川辺	琵琶湖疎水など									1	1	2		
琵琶湖									1					
寺社仏閣	青蓮院、南禅寺	1										1		
景勝地	將軍塚など											3		
総計		14	9	6	18	10	1	20	8	8	12	9	1	

「店・施設」の中では、カフェは、「ぼうっとする・考え事をする、読書、音楽鑑賞、勉強、食事、会話」との回答があり、かなり多用途で利用されていることに加え、ゆとりの時間を一人で楽しむ行動が多い。一方、レストランなどのその他の飲食店は、「勉強、食事、会話、待ち合わせ」との回答だが、ゆとりに関連する回答はなく、カフェより用途は限定されている。書店・図書館も「読書、勉強、買い物」とそれほど多用途では利用されていない。ショッピングセンターやスポーツセンター、パチンコといった娯楽施設は、買い物や施設本来の用途でのみ利用されているのがほとんどである。

「まち」の中では、回答が多かった三条通界限、河原町界限とも「食事、買い物」のみである。一方、繁華街の中にはない公園・広場や上七軒／町家、寺社仏閣は「散歩、景色を眺める」のみである。

「自然」の中では、最も回答が多かった鴨川が「ぼうっとする・考え事をする、会話、趣味（楽器、踊りの練習）、スポーツ」と多用途で利用されている。その他の場所は、ほとんどが「景色を眺める」か「レジャー（バーベキュー）」のみである。

この設問では、全体を通じて回答が多かったカフェ、鴨川が多用途で利用されていることが明らかになり、用途の多様性がお気に入りの場所として選定される一つの要素であることが示唆された。

f) 最もお気に入りの場所と併せて訪れる場所

最もお気に入りの場所を訪れた際に併せて訪れる場所を、自由記入方式で聞いた。すべてのサンプルで回答が得られている訳ではないため、主要な結果を示す。

「店・施設」の中では、お気に入りの場所であるカフェと併せて訪れる場所として、「本屋、ショップ（洋服屋）、寺社仏閣」との回答を得た。また、書店では「カフェ」、スポーツ施設では「スーパー銭湯」などの回答を得た。

「まち」の中では、河原町界限は「鴨川、カフェ」、三条通界限は「本屋、洋服屋」、寺社仏閣（竜安寺）は「きぬかけの道」などの回答を得た。

「自然」の中では、鴨川は「コンビニ、商店街、カフェ」、嵐山・渡月橋は「カフェ」、寺社仏閣は「カフェ（甘味処）」などの回答を得た。

総じて、「カフェと街中のショップ（洋服）・書店」や「カフェと鴨川・寺社仏閣などの景勝地」の組み合わせが多く、カフェを拠点に、周辺のショップや川辺などの安らぎ空間も併せて訪れるという行動が多かった。

この設問では、お気に入りの場所と他の施設やまち・自然環境との間に連続性があることで、お気に入りの場所を拠点とした一連の行動を形成することができ、そのことが、大学生にとってより魅力的な環境と捉えられていることが示唆された。

3. 若年者が選好する都市内空間についての考察

(1) 若年者が選好する都市内空間

アンケートで、お気に入りの場所として回答が多かった「カフェ」と「鴨川」について、以上の分析を踏まえ、お気に入りの場所の要素を抽出したものが、表-3である。両者の比較から、若年者が選好する都市内空間について考察する。

まず精神面では、カフェと鴨川で共通して、「一人になり、気持ちの切り替えができること」である。この場合の「一人」は、自宅の部屋といった社会から隔離されたような空間で一人ぼっちになりたいのではなく、周囲に人がいる社会的な空間の中で、他人との関係性のある程度意識しながら自分の時間を楽しみたい気持ちと考えることが適当であり、これを「一人感」と表現する。この「一人感」は、若年者が社会の中で自分を見つめ直す時間を持つことで、精神的な安らぎを感じ、そのことが自己形成に寄与するという点で、若年者が選好する都市内空間の重要な要素ではないだろうか。

続いて空間が提供するサービス面では、カフェは「読書・勉強・考え事ができること」、鴨川は「他人に迷惑をかけずに趣味（楽器の練習、スポーツなど）に興じることができること」である。これらは、行為としては別のもので捉えることもできるが、その本質は「自分の好きなことを楽しみたい」ということではないかと考える。さらに満足度を高める空間的要素として、カフェでは飲み物やBGMといった質の高いサービスの提供があり、鴨川では楽器やおしゃべりで音を出しても他人に迷惑が加わらないことが加わる。

最後に利便性として、カフェには、「買い物や散歩の拠点になる」「待ち合わせに使える」の要素が加わる。これは、お気に入りの場所での行動が、その前後の行動と連続性を持っており、精神的にも時間的にもその行動への切り替えが容易であることを重視したものであると捉えることができる。

表-3 お気に入りの場所の要素

	カフェ (図4)	鴨川 (図5)
精神面	一人になれる 気持ちの切替えができる ゆっくりできる	一人になれる 気持ちの切替えができる 自然の中で一息つける
空間が提供するサービス	読書・勉強・考え事ができる おいしい飲み物が飲める 好きな音楽が流れている	他人に迷惑をかけずに趣味(楽器・踊りの練習、スポーツ)に興じることができる 友達と楽しく会話ができる お金がかわらない
利便性	買い物や散歩の拠点になる 待ち合わせに使える	



図4 お気に入りの場所の代表例（カフェ）



図5 お気に入りの場所の代表例（鴨川河川敷）

以上の精神面、空間の持つ特性面からの考察を総括すると、若年者が選好する都市内空間を、「街中でありながら、一人一人が互いを干渉せず、存在を認め合い、自分の好きなことを楽しめる場所」と捉えることができる。

社会全体で、お金を持ち、時間をフルに使って何かをやり続けなければならないという価値観が形成されてきた中で、若年者は、他人のことに干渉せず自分は自分でありたいという内向きの気持ちと、常に人とつながっていなければならないという社会的要請の狭間で喘いでいる。このような精神状態の中で、少しの時間でも気持ちをオンからオフに切り替えて、自分の好きな世界に入ることができる「心のアイドリングストップ状態（完全なオフではなく、すぐにオンになれる状態）」を実現できる空間を、若年者は選好しているのではなかろうか。

このような空間が成立するためには、多様な人を受容しながらも、他人の行動を制約しないよう一定の秩序が保たれている必要がある。代表例としてのカフェは、比較的高価な対価を払ってその環境を得られる場所であり、利用者同士で気持ち的の一体感を共有することで、狭い空間の中でも秩序が保たれていると考えられる。

(2) これからの都市空間づくりへの提案

ここでは、若年者が選好する都市内空間の視点から、京都の街中で都市空間づくりについて提案する。

大学生を対象としたアンケートでは、お気に入りの場所として街中の広場や公園を挙げたケースが少なかった。これは、京都では、自然の中で、他人から干渉されず1人でゆっくりと過ごすことができる場所として、神社仏閣がその機能を代替しているためではないかと考えられる。桑子⁴⁾も、公共空間の豊かさを論じる中で、同様の指摘をしている。

しかし、神社仏閣は宗教施設であり、皆が気軽に利用するという印象には乏しい。街中に若年者を誘引し賑わいをつくるためにも、公園などの公共空間を活用して、若年者の選好を重視した空間を作ることは意義深い。

a) 既存の空間の評価

新たな空間を提案する前に、京都の代表的な街中の広場・公園を「若年者の選好」の視点から評価する。

初めに、神社仏閣より公共空間に近い京都御苑について考える。京都御苑は、緑豊かな広々とした空間にベンチなどの休憩設備が整えられており、空間的には鴨川と類似した印象がある。しかし、周囲との気持ち的の調和を重視する「若年者の選好」から見た場合、空間が広すぎる故に周囲との距離が遠い。そのため、一人感が薄く、利用者同士の気持ち的の一体感も生まれにくいのではないだろうか。また、商業エリアとのアクセスが悪く、次の行動の拠点としての利便性も高くない。

次に、商業エリアに近く利便性が高い京都市役所前広場について考える。一般的に、行政庁舎の内部が観光資源として利用されている場合、そこを目的地として訪れる人々が、前庭を滞留空間として利用するケースは多い。しかし、京都市役所庁舎は、行政機能しか有しておらず、目的地としての魅力を感じて訪れる若年者はほとんどいない。さらに、庁舎前広場は、周囲を道路に囲まれた開放空間であるため、空間としての一体感が保たれにくいことに加え、外から視線が集まりやすく、一人で落ち着ける空間としては捉えられにくいのではないだろうか。

また、田の字地区内（概ね、御池通、河原町通、四条通、烏丸通に囲まれた地域）の他の公園（例えば、御射山公園）は、規模が小さく、さらに開放性が高いため、やはり一人で落ち着ける空間としては捉えられにくいのではないだろうか。

これらいくつかの事例の評価から、「一人で落ち着ける」が核心的な要素である「若年者が選好する都市内空間」が構築されるためには、その空間にいる人同士が干渉し合わず一人感を感じられ、さらに、空間が外の環境からある程度分離されることで中にいる人同士が連帯感を感じられる程度に適度な広さを持っていることが条件となると推察される。

b) 新たな空間の提案

これらの条件が満たされている空間の一例として、京都国際マンガミュージアムが挙げられる(図-6)。この施設は、休校になった小学校の校舎と校庭を活用して、豊富なマンガを閲覧可能な形で展示した有料施設である。建物内の閲覧スペースに加えて芝生敷の庭があり、建物から庭へのエントランスにはテラス席も設置されている。庭は1辺が道路に面しているが、道路からの視線が集中しすぎない工夫も施されている。利用者は若年者に限らないが、好きなマンガを読むという共通の目的があり、互いに干渉せず一人でゆっくりと好きなことをすることができる。また、有料空間であり、秩序も保たれているので、利用者同士の気持ちの一体感が生まれやすい。

しかし、より多くの若年者が選好する空間となるためには、マンガを読むという特定の目的を果たせるだけでなく、「自分の好きなことを楽しめる」多用途な空間へと発展させる必要がある。ただし、この場合の多用途な空間とは、計画者が意図的に用途を追加することではなく、様々な目的を持つ若年者が、一時気持ちをオフにして、各自が好きなことをできる機能を備えているということの意味する。

具体的なイメージとしては、小学校の教室を図書館や自習室、楽器の練習室などにリノベーションし、カフェを併設し、さらに校庭を芝生敷にして、読書や音楽鑑賞、簡単なスポーツなどで使用することを許せば、利用の幅が広がり、多くの人が「自分の好きなことを楽しめる」空間となるのではないだろうか。

小学校は周辺からある程度分離され、まとまりのある空間である。街中の小学校であれば、商業エリアと連続性があり、オフからオンに気持ちを切り替えて次の行動に速やかに移ることも可能である。さらに、有料化は、空間の質を保証すると同時に、共通目的に対して料金を支払うという点で気持ちの一体感を醸成する一手法であると考えられる。

以上では、「若年者が選好する都市内空間」を構築するための、基本的な考え方を提案した。しかし、このように新たな施設を整備しなくても、現在でも街中に若年者が選好する空間は存在しているかもしれない。例えば、商業ビルのフロアの一角にある休憩スペースはその例である。そこには、簡単なテーブル・イスと自動販売機が設置されている。利用者は若年者に限らず、家族連れ、高齢者の団体など多様だが、それらの人々が混在しながら、一定の秩序を保ち、同じ空間を共有している。例えば、大学生は、就職活動の合間に缶コーヒーを飲みながら、次の予定を確認しつつほっと一息ついており、まさしく若年者が選好する都市内空間である。

こういった街中のちょっとした空間を若年者の視点で利用しやすくし、一定の秩序を持たせるだけで、若年者



図-6 京都国際マンガミュージアム

の「心のアイドリングストップ状態」を実現させる空間を形成することも可能である。このような視点で街中の空間を見直していくことが、社会全体で若年者の価値観を受容し、多世代が互いに相手を思いやり心豊かな社会が育まれる都市(いわば安寧の都市)の構築に向けた協働へとつながっていくのだろうと考える。

4. まとめと今後の課題

本研究では、直接的な行動調査から得られた知見に基づいて、若年者が選好する都市内空間を定義するとともに、それを構築するための基本的な考え方を整理した。

主要な結果は、若年者は、街中でありながら、他の人とある程度の関係性を保ちながら一人になり、ゆっくりと考え事や自分の好きなことをすることができる環境を求めているということである。このような感覚を満たす空間づくりは、若年者の価値観の受容、育成という点で、まちづくりの重要な視点である。

しかし、これらの知見の大部分は、限られたサンプルによるアンケート調査結果の中から導き出されたものであり、普遍性の点からは乏しい。今後、更なる調査結果の蓄積が必要である。また、本研究は、若年者の視点でのまちづくりの考え方を示したものであり、実現可能な都市政策については具体的に言及できていない。この点も、今後の精査が必要である。

参考文献

- 1) ケヴィン・リンチ(丹下健三、富田玲子訳):都市のイメージ新装版,岩波書店,2007.
- 2) ジェイン・ジェイコブズ(山形浩生訳):新版アメリカ大都市の死と生,鹿島出版会,2010.
- 3) 岡田 努:現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像,世界思想社,2007
- 4) 桑子 敏雄:感性の哲学,日本放送出版協会(NHKブックス),2001.